

「64ーロクヨンー前編」

★★★★

2016（平成28）年6月19日鑑賞＜T O H Oシネマズ西宮O S＞

監督：瀬々敬久
原作：横山秀夫『64（ロクヨン）』文春文庫刊
三上義信（警務部秘書課広報室広報官）／佐藤浩市
雨宮芳男（ロクヨンの被害者家族）／永瀬正敏
辻内欣司（県警本部長）／椎名桔平
赤間（警務部長）／滝藤賢一
石井（警務部秘書課長）／菅原大吉
二渡真治（警務部警務課調査官）／仲村トオル
荒木田（刑事部長）／奥田瑛二
松岡勝俊（刑事部捜査一課長）／三浦友和
御倉（刑事部捜査一課次席）／小澤征悦
望月（元ロクヨン追尾班）／赤井英和
村串みずき（元ロクヨン自宅班担当婦警）／鶴田真由
漆原（元ロクヨン自宅班長）／菅田俊
幸田一樹（元ロクヨン自宅班）／吉岡秀隆
柿沼（元ロクヨン自宅班）／筒井道隆
日吉浩一郎（元ロクヨン自宅班（科捜研））／窪田正孝
日吉雅恵（日吉浩一郎の母）／鳥丸せつこ
蔵前（警務部秘書課広報室主任）／金井勇太
美雲（警務部秘書課広報室婦警）／榮倉奈々
諏訪（警務部秘書課広報室係長）／綾野剛
秋川（東洋新聞キャップ）／瑛太
手嶋（東洋新聞サブキャップ）／坂口健太郎
三上美那子（三上の妻、元婦警）／夏川結衣
三上あゆみ（三上の一人娘、高校生）／芳根京子
2016年・日本映画・121分
配給／東宝

＜まずは、このタイトルに注目！＞
横山秀夫のミステリー小説の面白さは、『半落ち』（03年）（『シネマルーム4』230頁参照）、『クライマーズ・ハイ』（08年）（『シネマルーム19』269頁参照）等が映画化され、大ヒットしていることから明らかだ。そして、『64（ロクヨン）』は2013年に「このミステリーがすごい！」第1位に選ばれるなど累計で150万部を突破しているヒット作だ。しかし、最初からこれを「ロクヨン」と読める人は少ないだろうし、それが昭和天皇が崩御した「昭和64年」を意味することも、すぐにはわからないはずだ。

昭和24年1月26日生まれ私は、昭和64年の正月を40歳直前に迎えたが、昭和天皇が崩御した日のことは鮮明に覚えている。その昭和64年はわずか7日間で終わった。

そして1月7日には、当時の小淵恵三官房長官が「平成」と書かれた新しい年号を掲げてテレビに登場した。そのことも鮮明に覚えている。そんな昭和64年の1月5日に発生したのが、関東近県で漬物工場を営む雨宮芳男（永瀬正敏）の7歳の娘・翔子の誘拐事件だ。

昭和から平成へと年号が変わってから早くも28年が経過したが、誘拐事件の公訴時効は15年。しかして、昭和64年1月5日に発生した少女誘拐事件が「64」と名付けられた真の意味は、平成14年に再び発生する誘拐事件を中心に展開する本作後編のハイライトの中で次第に明らかにされていくから、それに注目！『ソロモンの偽証 前篇・事件』（15年）（『シネマルーム36』95頁参照）、『ソロモンの偽証 後篇・裁判』（15年）（『シネマルーム36』101頁参照）と同じように、前編と後編の2部作として構成する近時のやり方に私は基本的に反対だが、まずは「犯人は、まだ昭和にいる。」をキャッチフレーズとした、本作のタイトル『64（ロクヨン）』に注目！

＜中国では「六四」はあの天安門事件のこと！＞

ちなみに、中国では「六四（ロクヨン）」と言えば、1989年の6月4日に起きた天安門事件のことを指すので要注意！政治改革に積極的だった胡耀邦元総書記が同年4月に死亡したことをきっかけに、政治改革を求める学生や市民が北京の天安門広場に集結したのに対し、中国人民解放军は無差別発砲を行ったばかりか装甲車まで使って学生や市民を武力弾圧した。香港では、毎年6月4日に天安門事件を記念（追悼）する集会が開かれ、今年の6月4日には27回目の集会が開かれたが、中国のそれに対する監視体制は厳しいものがある。

ちなみに、中国（中華人民共和国）国内では、検索エンジンで「六四天安門事件」というキーワードを検索すると、接続不能になってしまう。したがって、本作が描く「64」事件を検索する場合は、その検索エンジンを使用しないように。

＜犯人の要求は？悲劇的結末は？＞

本作冒頭、「サトウ」と名乗る犯人の命ずるまま身代金2000万円が入ったスーツケースを持って、次々と指定される場所へ急ぐ雨宮の姿が描かれる。誘拐事件をテーマにした映画は、黒澤明監督の『天国と地獄』（63年）をはじめとしてたくさんある。そこでは、犯人の要求を聞き、それに従って動いている間に、いかに犯人像を分析し、犯人に近づいていくかがポイントになるが、それが容易でないことは言うまでもない。雨宮が文字どおり右往左往させられた挙げ句、犯人が最後に要求したのは、身代金が入ったスーツケースを川の中に入れること。もちろん、雨宮はその要求どおりスーツケースを川へ投げ入れたが・・・。

事件の通報を受けた警察はその間、追尾班と自宅班に分かれて懸命の犯人追尾を続けたが、結局当日は犯人の逮捕はあろうか、事件の糸口もつかめないまま終わることに。そしてその後、川の下流でカラッポになったスーツケースのみを発見。さらに、事件発生から2日後の1月7日には廃車置き場にある1台の車のトランクの中から、変わり果てた姿の翔子が発見されることに・・・。

時を同じくして、昭和天皇が崩御した。昭和38（1963）年3月に起きた「吉展ちゃん誘拐殺人事件」は日本国中を騒がす大事件となったが、昭和から平成への変化という大ニュースを前に、「翔子ちゃん誘拐事件」は世間の関心を集めることもなく、そして捜査も進展しないまま、時間ばかりが過ぎていくことに。

＜主人公の職場は広報官！広報官の苦労は？＞

「ミステリーもの」や「犯罪もの」の主人公は、カッコ良いかカッコ悪いかは別として、刑事に決まっている。また「法廷もの」の主人公は検事もあるが、そのほとんどはカッコ良い弁護士に決まっている。しかし、前編・後編を通じて佐藤浩市が演ずる本作の主人公・三上義信は刑事ではなく、警務部秘書課広報室の広報官だ。

彼は26年間刑事部に所属し、ロクヨン捜査にも関わっていたが、平成14年12月に現職に異動となったらしい。その理由は明確にされないが、『64』前編・後編を通じて描かれる、日本の警察の警務部vs刑事部の争い（確執）、キャリア組vsノンキャリア組の争い（確執）の実態を見れば、三上の異動もそんな日本的な（腐った）システムのとぼっちによるものだということがわかるはずだ。それはともかく、本作では主人公・三上のそんな警務部広報官という立場に注目！

＜広報室vs記者クラブの対決に注目！＞

『64』前編たる本作で詳しく描かれるのは、広報室vs記者クラブの争い（確執）。裁判所に「司法記者クラブ」があり、市役所に「市政記者クラブ」があるのと同じように、警察には「警察記者クラブ」がある。私はそんな記者クラブ制そのものの問題点をよく知っているが、世間ではそれはほとんど知られていない。

犯罪報道では、被害者や加害者の名前を実名にするのか、それとも匿名にするのか、をめぐって対立することがよくある。現在、諏訪（綾野剛）と蔵前（金井勇太）、そして美雲（榮倉奈々）という3人の部下をもつ広報室長の三上が、東洋新聞キャップの秋川（瑛太）をボス格とする県警記者クラブと対立しているのは、ある交通事故の加害者の名前を、広報室が実名ではなく匿名で発表したため。レイプ事件では被害者の名前は伏せるのが慣例。また、加害者が少年なら加害者の名前を匿名にするのは仕方ないが、そうでなければ交通事故の加害者は実名で発表されるはず。それなのに、今回はなぜ匿名なの？ひょっとして、それは県警の誰かお偉いさんの関係者が絡んでいるためでは？記者クラブはそんなふうに勘ぐって、実名の公表を三上に迫ったわけだ。県警広報室vs県警記者クラブの間では常にこの手のイザコザ（解釈の相違）はありがちだが、本作ではそれがえらく詳しく描かれるので、本作を契機にその問題点をしっかり勉強したい。

＜加害者の名前をなぜ匿名に？佐藤浩市の演技に注目！＞

匿名報道をめぐる広報室vs記者クラブの対決は、結局三上が自分のクビをかけて、記者クラブの記者に対して（のみ）交通事故の加害者の名前を公表し、それを実際に新聞、テレビ等で公表するか否かは「自分たちで判断してくれ」という形で終わる。しかして、この三上の一人語りとなる長いシーンは脚本9頁分の長回しになるらしい。なぜ、この交通事故に関しては、加害者の名前は伏せられたの？

それは、表向きはその加害者が有名な大企業の社長の娘だったためだが、実はそのホントの理由は、その交通事故によって死亡した被害者が辿ってきた人生にあった。加害者の名前を公表すれば被害者のそんな人生も公になってしまうが、ホントにそれでいいの？そう考えた三上は、迷いに迷い、苦悩し続けたわけだ。また、この交通事故の加害者の名前を公表すべきか否かについての広報官としての苦悩は、実は後述する一人娘・あゆみ（芳根京子）の失踪問題に悩む三上自身の苦悩でもあったわけだ。この約9分にわたる佐藤浩市の演技は、ある意味で前編のクライマックスとなる見せ場だから、しっかり味わいたい。

もっとも、本作に見る県警広報室vs県警記者クラブの対立シーンは、40年以上弁護士をやってきた私の目には、いくら何でも誇張気味と言わざるをえない。また、本作後編では新たに発生した「64模倣誘拐事件」について、監視行で行われる記者会見への出席者が東京本社の記者中心になると、三上に対して「報道の自由」をたてに、あれほど偉そうに食い下がっていた秋川のような地方勤務の記者は肩身が狭くなり、出番がなくなってくるので、そんな現実にもしっかり注目したい。

＜三上が抱える三重苦とは？その中の仕事ぶりに注目！＞

1960年代の高度経済成長時代の日本、サラリーマンは気楽な稼業ときたもんだ・・・。あの時代の植木等バリの生き方、あるいはそんないい時代は過ぎてしまっても、『釣りバカ』シリーズで西田敏行が演じるハマちゃん流の生き方をすれば、どんな時代でも、どんな境遇でも気楽に生きていけるはず。しかし、本作に見る三上のように何ゴトも真面目に考えて、自分の責任だとしよい込んでいくと何となく大変だ。

『青春の門』（81年）でデビューして、第24回ブルーリボン賞新人賞を受賞した佐藤浩市は、父親・三國連太郎との「確執」も乗り越えて、今や日本映画界になくてはならない大黒柱になっている。本作では、そんな佐藤浩市演じる三上が、①ある交通事故の加害者を広報室が匿名発表したことに對して、それは県警の都合による隠匿だと猛抗議する記者クラブと広報室との確執をまとめる苦労、②少女誘拐事件の時効が1年後に迫る中、「64」の捜査員の激励のため全国の警察を統括する警務庁長官の県警視察の段取りと、被害者家族慰問の段取りを広報室長として整えなければならぬ苦労、そして、③自分の一人娘・あゆみが失踪・家出していることに対して妻・美那子（夏川結衣）とともになかなか対処するかという苦労、の「三重苦」に苦しむ姿が描かれる。ちなみに彼は、『愛を積むひと』（15年）と『起終点駅 ターミナル』（15年）（『シネマルーム37』48頁参照）の演技によって、「おおさかシネマフェスティバル2016」で主演男優賞に選ばれたため、2016年3月6日の授賞式とその後のパーティーには私も参加し、親しく話をしたが、その気さくな人柄と足の長いカッコ良さにビックリさせられた。

今が旬の俳優・佐藤浩市が、そんな「三重苦」に苦しみながら懸命に広報官としての職務に専任する姿を、本作ではじっくり鑑賞したい。

＜警務部vs刑事部、キャリア組vsノンキャリア組＞

『64』前編たる本作は、冒頭に発生した「翔子ちゃん誘拐事件」の捜査を描くものかと思っていたが、そうではなかった。本作は、「64」の時効が迫る平成14年12月の時点で広報官になっている三上が、警察庁長官の被害者家族慰問の同意を取り付けるため、再び雨宮に接触する中で、未だ「昭和64年」に取り残されている雨宮の姿を明らかにしていくもの。また、警務部vs刑事部、またキャリア組vsノンキャリア組の対立に明け暮れている警察組織の問題点（腐敗ぶり）を対比させていくものだ。これはもちろん、後編のクライマックスとなる「64模倣誘拐事件」への布石となるものだから、しっかり押さえておく必要があるが、正直言って広報室vs記者クラブの対立と同じく、少ししこ過ぎる感がある。

本作に描かれる、警務部vs刑事部の対立、そしてキャリア組vsノンキャリア組の対立に登場する人物は、県警本部長の辻内欣司（椎名桔平）を筆頭として、警務部では、警務部長の赤間（滝藤賢一）、警務部秘書課長の石井（菅原大吉）、警務部警務課調査官の二渡真治（仲村トオル）、他方、刑事部では、刑事部長の荒木田（奥田瑛二）、刑事部捜査一課長の松岡勝俊（三浦友和）、刑事部捜査一課次席の御倉（小澤征悦）の面々だ。

もっとも、警務部vs刑事部の対立と言っても、警務部上層部の赤間、石井、二渡は刑事部との「もたれ合い体質」にどっぷり浸かっているが、現実には警察官が対立する相手は広報室長の三上だ。また、キャリア組のトップは辻内、ナンバー2は赤間だが、これはあくまで別格的存在らしく、ノンキャリア組のトップである荒木田刑事部長と現実に対決するシーンも皆無だ。このように『64』前編たる本作では、いずれもその役にピッタリの俳優が多少誇張気味ながらしっかりその役柄を演じているので、それをしっかり確認しておきたい。

＜「幸田メモ」とは？警察内部のヤミとは？＞

現在、「パナマ文書」をめぐって、西欧諸国の政府要人や大富豪のみならず、ロシアのプーチン大統領や中国の習近平国家主席も大問題に直面（？）している。また、ミステリー小説においては、「〇〇メモ」なるものが事件の解明に大きな役割を果たすことが多い。ちなみに、2006年当時に日本国中を騒がせたのが、元宮内庁長官の故・富田朝彦氏が書いた「富田メモ」。そこには、1988（昭和63）年4月28日付で、昭和天皇のご発言として「A級（戦犯）が合祀されその上 松岡、白取までもが」「だから私はあれ以来参拝していない それが私の心だ」と走り書きされていた。しかして、それはホントに昭和天皇がA級戦犯の合祀に反対だったことを裏付けるものなの？富田メモの「流失」とその解釈をめぐっては、その後さまざまな議論がなされたが、今なおその真相は解明されていない。しかして、本作では、元ロクヨン自宅班の刑事・幸田一樹（吉岡秀隆）が残した「幸田メモ」が最大のポイントになり、後編への橋渡しの役割を担うことになる。

何度も言うように、三上は現在警務部広報室の仕事だから、今も細々と続いているロクヨンの捜査に介入する権限は全くない。しかし、警察庁長官の被害者家族慰問の了解を取り付けるため、三上が14年ぶりに雨宮の自宅を訪れると、未だ「昭和64年」に取り残されている雨宮は、ハッキリと慰問を拒絶。さらに記者クラブからも、匿名問題が原因で長官視察取材のボイコット宣言を飛ばしてしまうことに。このように、八方塞がりになった三上が、雨宮の頑なな態度の原因を探るため、かつてのロクヨン捜査員で、今も捜査に従事している柿沼刑事（筒井道隆）を訪れる中で見てきたものが、「幸田メモ」だ。

これは、元ロクヨン自宅班で犯人からの電話の録音を担当していた幸田刑事が残したメモだが、そこには一体何が書かれていたの？そして、県警はなぜそれを極秘にしたの？「パナマ文書」をめぐるヤミも深いが、「幸田メモ」をめぐる県警内部のヤミも相当深そうだ。

＜三上による、幸田メモのヤミの解明は？＞

本作中盤では、追尾班と自宅班に分かれた14年前のロクヨン捜査の模様が再現されるが、そこに見る録音システムの姿はいかにもお粗末。県警レベルの誘拐事件の捜査とはこんな程度か、とビックリさせられるはずだ。時効直前になって捜査が進展せず、捜査体制が先細りになったのは、そんな事情のためだ。そんな真相こそ、マスコミはきっちり取材し、世間に公表しなければならぬのでは・・・？

「幸田メモ」の存在を知った三上は、自分の権限や立場を超えてその解明のために動きはじめたが、元ロクヨンの自宅班長で、現在は所轄の署長を務める漆原（菅田俊）、元ロクヨンの追尾班で、早期退職し現在は家業の農家を継いでいる望月（赤井英和）らの口がメチャ固いのは一体なぜ？また、柿沼だけは今なお刑事としてロクヨン捜査に従事していたが、科捜研からロクヨンに召集された日吉浩一郎（窪田正孝）はロクヨン事件以降14年間引き籠ったままだし、幸田はロクヨン事件の半年後に辞職し、現在はスーパーの警備員になっていた。それは一体なぜ？

こんなふうには広報室長（にすぎない）の三上が、今頃になって「幸田メモ」をしつこく嗅ぎまわることに対して、ロクヨン捜査の際、直属の上司で、現在は捜査一課長をしている松岡だけは多少理解を示したが、現在の刑事部長の荒木田、捜査一課次席の御倉は明確な敵意を示すほどの拒絶反応を見せたのはある意味当然だ。また、赤間、石井、二渡ら警務部の上層部が三上に対して明確に拒絶反応を示したのも当然だ。そんな状況下、三上による「幸田メモ」の解明はどこまで進んでいくの？

＜新たな誘拐事件が発生！こりゃ、「64」の再現？＞

このように今や三上は、警察庁長官の被害者家族慰問について雨宮の同意を取り付けるという、広報室長に与えられた任務を果たすについて大きな困難に直面していただけではなく、「幸田メモ」の解明では八方ふさがりの状況に陥っていた。さらに三上には、私生活においても、思春期にある一人娘・あゆみとの対立の中、あゆみの失踪、家出という大問題が発生！三上はロクヨン事件では身代金受け渡し場所に張り込んでいた婦警、美那子と結婚していた。美那子はその後警察を退職し、家庭を守り、子育てもしっかりやっていたが、どうも「外向き」ばかりの父親は、子育ての面では失格だったらしい。三上家の場合の「父娘対立」の直接の理由は、容姿に悩むあゆみが整形したいと申し出たことに對し、三上が頭ごなしに拒否したことだが、ホントの原因は父娘の日常的な対話不足と相互理解の不足。記者クラブとの対立の他、「幸田メモ」の解明の中での刑事部との対立や警務部上層部との対立に關えている今の三上に、さらに娘の失踪、家出という第3の難問が加わったわけだから、三上の苦悩は深刻だ。

そんな中、警察庁長官の被害者家族慰問について、雨宮がやっと了解してくれたのは朗報だったが、よく考えてみれば、雨宮の態度が急に変わったのは一体なぜ？そして、警察庁長官の被害者家族慰問が迫ってくる中、新たな誘拐事件が勃発！その被害者は？犯人の要求は？お金を入れたトランクの運び先は？犯人の要求を聞いていると、それはまさに15年前のあのロクヨン事件の再現だ。こりゃ一体なに？一体誰が、何のために、今頃になって「ロクヨン事件」をなぞるような誘拐事件を・・・？県警本部は色めき立ち、記者クラブも総動員体制をとったが、さて後編はこの新たな誘拐事件をめぐって、どのように展開していくのだろうか？